大学生不登校傾向尺度の開発（続報）

堀井　俊章

Development of a Scale to Measure the Tendencies of University Students to not Attend Classes (Second Report)

Toshiaki HORII

横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ（教育科学）No.17 別冊

Reprinted from
THE EDUCATIONAL SCIENCES
Journal of the College of Education and Human Sciences
Yokohama National University
No.17, FEBRUARY, 2015

大学生不登校傾向尺度の開発（続報）

Development of a Scale to Measure the Tendencies of University Students to not Attend Classes (Second Report)

堀井　俊章（Toshiaki HORII）　　学校教育講座（内 3312）（horii@ynu.ac.jp）

Ⅰ　問題と目的

大学生の不登校に関する研究の動向を踏まえると、主に 1990 年代より研究が進み、「不登校の大学生数」「不登校のタイプ・背景要因」「不登校の事例・対応」に関する研究の成果が相次いで報告されるようになった（堀井 , 2013a）。しかし、不登校傾向の実証研究の発展が今一つ伸び悩み、その背景には、大学生の不登校傾向を測定する有効な尺度、すなわち信頼性と妥当性を十分に備えた尺度が存在しないことにあると考えられ、堀井（2013b）は大学生不登校傾向尺度の開発に着手した。

その研究では、大学生の不登校傾向（大学の正課活動に対する回避傾向）を測定する 12 項目の尺度、すなわち大学生不登校傾向尺度（以下、本尺度）が構成され、大学生 544 人を対象に実施された。教示文は「あなたの大学生活の様子や気持ちについてお尋ねします。次のことがらが自分に「あてはまる」か「あてはまらない」か、その程度を〇で囲んで下さい」となっている。各項目に対する回答は、「非常にあてはまる（６点）」「あてはまる（５点）」「ややあてはまる（４点）」「どちらともいえない（３点）」「ややあてはまらない（２点）」「あてはまらない（１点）」「全然あてはまらない（０点）」の７件法で求めるもので、得点が高いほど各項目の意味する不登校傾向が高いことを表す（逆転項目を除く）。因子分析の結果、登校回避行動と登校回避感情の２因子が抽出され、それぞれ下位尺度化された（尺度項目は表１に示す）。登校回避行動は、「欠席しがちな授業がある」「なんとなく大学に行かないことがある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する行動的側面を表す。また、登校回避感情は、「日曜日の夜、明日 大学に行きたくないと思うことがある」「朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある」などの項目から構成され、大学への登校を回避する感情的側面を表す。本尺度の Cronbach の α 係数と再検査信頼性係数は十分な値を示した。

表１　大学生不登校傾向尺度の項目

尺度１：登校回避行動	
1	欠席しがちな授業がある
2	なんとなく大学に行かないことがある
3	大学を休みがちである
4	授業を遅刻しがちである
5	大学に行きたいけれどもなぜか行けないことがある
6	一日の授業がすべて終わる前に帰宅することがある
尺度２：登校回避感情	
1	日曜日の夜、明日 大学に行きたくないと思うことがある
2	朝、今日は大学に行きたくないと思うことがある
3	大学をしばらく休みたいと思うことがある
4	一日の授業がすべて終わる前に帰宅したくなることがある
5	大学に行くのは楽しい（注：逆転項目）
6	参加したくない授業がある

さらに、大学生 206 人のデータより、本尺度はそれと概念的に関連が予測される尺度（対人恐怖心性尺度（堀井・小川 , 1996, 1997）、対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井 , 2006a）、日本版 SDS 自己評価式抑うつ性尺度（福田・小林 , 1983）、アパシー心理性格尺度（下山 , 1995）、同一性対同一性拡散の測定尺度（Rasmussen の自我同一性尺度日本語版（宮下 , 1987）の下位尺度））と有意な相関を示した（表２）。また、大学生 190 人のデータより、本尺度は年間欠席日数と有意な相関を示した。本尺度は心理尺度として一定水準以上の信頼性（内的整合性・安定性）と妥当性をもつことが確認されている。

表２　大学生不登校傾向尺度と関連尺度との相関（堀井，2013b）

	大学生不登校傾向尺度	
	登校回避行動（.88）	登校回避感情（.78）
対人恐怖心性尺度		
自分や他人が気になる悩み（.85）	.05	.21**
集団に溶け込めない悩み（.90）	.16*	.29***
社会的場面で当惑する悩み（.87）	.22**	.38***
目が気になる悩み（.91）	.22**	.41***
自分を統制できない悩み（.83）	.31***	.39***
生きることに疲れている悩み（.84）	.21**	.41***
対人恐怖心性尺度Ⅱ		
劣等恐怖（.78）	.16*	.32***
被害恐怖（.86）	.23**	.37***
自己視線・醜形恐怖（.80）	.21**	.35***
孤立・親密恐怖（.81）	.21**	.38***
加害恐怖（.81）	.22**	.34***
日本版 SDS 自己評価式抑うつ性尺度		
抑うつ性（.82）	.30***	.45***
アパシー心理性格尺度		
張りのなさ（.66）	.21**	.33***
自分のなさ（.75）	.22**	.40***
味気のなさ（.68）	.16*	.36***
適応強迫（.38）	—	—
同一性対同一性拡散の測定尺度		
同一性対同一性拡散（.71）	-.21**	-.44***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001
（ ）内はα係数

表２より、本尺度で測定される不登校傾向と他の心理的特性との関連が検討され、不登校傾向の特徴の一端が明らかにされた。しかし、今後不登校傾向の実証研究を展開する上で、本尺度で測定される不登校傾向の特徴をより明確に捉えておく必要がある。先行研究の知見および学生相談の経験的知見に基づくと、大学生の不登校および不登校傾向は、「メンタルヘルス」「適応」「パーソナリティ一般」「自己・自我」「動機づけ・認知」「対人関係」などの多様な心理的特性と密接な関連にあることが予測される（例：堀井 , 2006b；井崎他 , 2009；小柳 , 1996；鈴木他 , 2004；高橋 , 1996；高塚 , 2000, 2002；津田他 , 2008；鶴田他 , 2002）。そこで本研究では、本尺度で測定される不登校傾向と、それと関連が予測される多様な心理的特性との関連を分析し、その結果を呈示することを目的とする。このような研究は本尺度の妥当性をさらに検討するためにも意義があると考えられる。

Ⅱ　方法

1　調査内容

本尺度およびそれと関連が予測される心理測定尺度（以下、関連尺度）を用いた（全尺度を調査対象者に同時に実施したのではなく、調査対象者および時期を分けて実施した）。本尺度の概要は前述の通りである。以下、関連尺度についてカテゴリー別に説明する。

（１）メンタルヘルス

１）UPI 学生精神的健康調査

UPI 学生精神的健康調査（University Personality Inventory）は 1966 年に全国大学保健管理協会から発表されたスクリーニングテスト（60 項目２件法）である（松原 , 1995）。得点が高いほど健康度が低い。神経症、心身症などの心身の諸問題を発見する目的で全国の大学で幅広く利用されている。検証尺度４項目を除く 56 項目と本尺度との関連を分析した。

２）UPI-RS

UPI-RS（rating scale）は UPI 学生精神的健康調査（２件法）を４件法の評定尺度に改訂したもの（高橋・小林 , 2004）である（60 項目）。得点が高いほど健康度が低い。検証尺度４項目を除く 56 項目と本尺度との関連を分析した。

３）日本版 GHQ28

日本版 GHQ 精神健康調査票（General Health Questionnaire）の 28 項目短縮版（中川・大坊 , 1985）である。精神健康度を測定する指標として臨床場面で比較的よく使用されている。４つの下位尺度（身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ傾向）から構成されている（４件法）。

４）大学生活不安尺度

広く大学生活全般における不安を測定する尺度（藤井 , 1998）である。３つの下位尺度（日常生活不安、評価不安、大学不適応）から構成されている（全 30 項目２件法）。

（２）適応

１）心理的 well-being 尺度

心理的 well-being（人生全般にわたるポジティブな心理的機能）を測定する尺度（西田 , 1973）である。６つの下位尺度（人格的成長、人生における目的、自律性、自己受容力、環境制御力、積極的な他者関係）から構成されている（全 43 項目６件法）。

２）PIL テスト日本版 Part A

PIL（Purpose in Life）、すなわち、人生の目的・意味・生きがいを見出している程度を測定する PIL テスト日本版（PIL 研究会 , 1998）の Part A である（全 20 項目７件法）。

３）精神的回復力尺度

精神的回復力を測定する尺度（小塩他 , 2002）である。レジリエンス（resilience：困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果）の状態にある者の心理的特性を反映している。３つの下位尺度（新奇性追求、感情調整、肯定的な未来志向）から構成されている（全 21 項目５件法）。

４）職業未決定尺度

職業未決定の状態を測定する尺度（下山 , 1986）である。６つの下位尺度（混乱、未熟、安直、猶予、模索、決定）から構成されている（全 39 項目３件法）。

５）大学生活チェックカタログ

大学生の QOL（Quality of Life）を測定する尺度（福盛他 , 2001）である。12 の下位尺度（自己

不確実感・不安、社会的関係、現在のいきがい・充実、自己肯定感、将来への展望、大学内学習、積極性、大学全体への満足感、睡眠・食欲・体調、仲間との活動、無気力、大学内学習）から構成されている。本調査では福盛他（2001）が Cronbach の α 係数を算出した時に用いた 69 項目を使用した（２件法）。

（３）パーソナリティ一般

１）日本版 NEO-FFI

パーソナリティ特性の５因子モデルに基づいて作成された NEO-FFI（NEO Five-Factor Inventory; Costa & McCrae, 1992）の日本語版（下仲他 , 1999）である。５つの下位尺度（神経症傾向､外向性、開放性、調和性、誠実性）から構成されている（全 60 項目５件法）。

（４）自己・自我

１）自尊感情尺度

Rosenberg（1965）によって作成された自尊感情（self esteem）を測定する尺度の日本語版（山本他 , 1982）である（全 10 項目５件法）。

２）自意識尺度

自意識（self-consciousness）、すなわち、自己に対して注意を向ける傾向を測定する尺度（菅原 , 1984）である。２つの下位尺度（公的自意識､私的自意識）から構成されている（全 10 項目７件法）。

３）Rasmussen の自我同一性尺度日本語版

Rasmussen（1961, 1964）が作成した自我同一性（ego identity）を測定する尺度の日本語版（宮下 , 1987）である。６つの下位尺度（基本的信頼感対不信感、自律性対恥・疑惑、自主性対罪悪感、勤勉性対劣等感、同一性対同一性拡散、親密性対孤立）から構成されている（全 67 項目７件法）。

４）青年期の自我発達上の危機状態尺度

青年期における自我発達上の危機（ego developmental crisis）の状態を測定する尺度（長尾 , 1989）である。A 水準（青年期の心の葛藤）と B 水準（青年期の不適応）に分かれ、さらに A 水準は７つの下位尺度（決断力欠如、同一性拡散、自己収縮、自己開示対象の欠如、実行力欠如、親とのアンビバレント感情、親からの独立と依存のアンビバレンス）から構成され、B 水準は７つの下位尺度（緊張とその状況の回避、精神衰弱、身体的痛み、稀な体験や精神・身体的反応、閉じこもり、身体的疲労感、対人的過敏性）から構成されている（全 50 項目、A 水準 26 項目は５件法、B 水準 24 項目は３件法）。

（５）動機づけ・認知

１）達成動機測定尺度

達成動機（achievement motive）の程度を測定する尺度（堀野・森 , 1991）である。２つの下位尺度（自己充実的達成動機、競争的達成動機）から構成されている（全 23 項目７件法）。自己充実的達成動機とは他者・社会の評価にとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機であり、一方、競争的達成動機とは他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることをめざす達成動機とされている。

２）成功恐怖測定尺度（FS1）

成功に対する恐怖（Fear of Success）の程度を測定する尺度（堀野 , 1991）は３尺度（FS1～FS3）から成る。そのうち FS1 を用いた。FS1 は３つの下位尺度（対人的配慮、成功の否定的感情、優越欲求の少なさ）から構成されている（全 18 項目７件法）。

３）新完全主義尺度

完全主義（perfectionism）を自己の枠組みで多次元的に捉えた尺度（桜井・大谷 , 1997）である。４つの下位尺度（完全でありたいという欲求、自分に高い目標を課する傾向、ミス（失敗）を過度に気にする傾向､自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向）から構成されている（全 20 項目６件法）。

４）Locus of Control 尺度

Locus of Control（内的―外的統制）を測定する尺度（鎌原他 , 1982）である（全 18 項目４件法）。内的統制とは自己の行動と強化が随伴すると認知し、自己の内的要因（自己の能力、技術、努力など）によって強化がコントロールされているという信念であり、一方、外的統制とは自分の行動と強化が随伴しないと認知し、強化が外的要因（他者や運など）によってコントロールされているという信念である。

５）楽観性尺度

楽観性（optimism）を測定する尺度（吉村 , 2007）である。２つの下位尺度（気楽さ、前向きさ）から構成されている（全 10 項目５件法）。

（６）対人関係

１）開示状況質問紙

状況別の自己開示（self-disclosure）の傾向を測定する尺度（遠藤 , 1989）である。５つの下位尺度（個人的状況、社会的状況、非日常的状況、密接的状況、家族的状況）から構成されている（全 18 項目６件法）。

２）青年用アサーション尺度

青年用のアサーション（assertion：自分の感情や考えを主張すべきときに、相手の立場を尊重しつつ、その場にふさわしい方法で率直にそれを表現すること）を測定する尺度（玉瀬他 , 2001）である。２つの下位尺度（関係形成、説得交渉）から構成されている（全 16 項目５件法）。なお、関係形成は人とのよい関係を形成することに関わり、説得交渉は何らかの葛藤的な場面において相手に対して説得や交渉を行うことに関わるものとされている。

３）孤独感の類型判別尺度

孤独感（loneliness）を測定する尺度（落合 , 1983）である。２つの下位尺度（人間同士の理解・共感の可能性、自己の個別性の自覚）から構成されている（全 16 項目５件法）。本研究では下位尺度別に本尺度との関連を分析した。

４）劣等感項目

劣等感（inferiority feeling）を測定する尺度（高坂・佐藤 , 2008）である。８つの下位尺度（異性とのつきあいの苦手さ、学業成績の悪さ、運動能力の低さ、家庭水準の低さ、性格の悪さ、友達づくりの下手さ、統率力の欠如、身体的魅力のなさ）から構成されている（全 50 項目５件法）。

５）P-F スタディ（成人用）

P-F スタディ（Picture-Frustration Study）は Rosenzweig によって考案された投影法（半投影法）である（上記の関連尺度（質問紙法）とはテスト形式を異にする）。フラストレーション反応や対人関係のありかたが反映される心理検査である（秦 , 2007, 2010；林他 , 2007）。

２　調査対象・期日

調査対象者は首都圏の大学生 2,601 人（男性 1,417 人、女性 1,184 人）であった。調査対象者を 12 に区分して調査が行われた（表３）。各調査は平成 21 年 11 月から平成 25 年 7 月にかけて実施された。

表３　調査対象と使用尺度

調査	総人数	平均年齢（*SD*）	男性人数	女性人数	使用尺度[a)]
サンプル A	236	19.72(1.26)	119	117	UPI 学生精神的健康調査
サンプル B	201	20.12(1.21)	151	50	UPI-RS
サンプル C	335	20.24(1.05)	205	130	日本版 GHQ28
サンプル D	238	19.05(1.10)	136	102	大学生活不安尺度 大学生活チェックカタログ
サンプル E	247	19.60(1.28)	121	126	心理的 well-being 尺度 達成動機測定尺度 成功恐怖測定尺度（FS1） 新完全主義尺度
サンプル F	165	20.30(0.92)	76	89	PIL テスト日本版 Part A 青年用アサーション尺度 劣等感項目
サンプル G	248	19.02(0.99)	154	94	精神的回復力尺度 日本版 NEO-FFI 青年期の自我発達上の危機状態尺度
サンプル H	193	19.84(1.02)	88	105	職業未決定尺度
サンプル I	232	20.58(1.13)	105	127	自尊感情尺度 自意識尺度 開示状況質問紙 孤独感の類型判別尺度
サンプル J	282	19.70(1.18)	153	129	Rasmussen の自我同一性尺度日本語版
サンプル K	120	20.42(1.32)	60	60	Locus of Control 尺度 楽観性尺度
サンプル L	104	20.67(1.31)	49	55	P-F スタディ（成人用）

[a)] 大学生不登校傾向尺度は全サンプル共通のため省略

Ⅲ　結果と考察

1　大学生不登校傾向尺度および関連尺度の信頼性

本尺度の Cronbach の α 係数を算出した。表４を見てわかるように、α 係数は登校回避行動では .85～.90、登校回避感情では .73～.84 であり、本尺度の高い信頼性（内的整合性）が確認された。

表４　大学生不登校傾向尺度の α 係数

	大学生不登校傾向尺度	
	登校回避行動	登校回避感情
サンプル A	.85	.84
サンプル B	.87	.79
サンプル C	.88	.78
サンプル D	.86	.76
サンプル E	.86	.81
サンプル F	.90	.81
サンプル G	.87	.78
サンプル H	.90	.83
サンプル I	.90	.83
サンプル J	.87	.73
サンプル K	.90	.82
サンプル L	.87	.81

関連尺度のα係数は表５～表 10 に示した。UPI 学生精神的健康調査は .93、UPI-RS は .97、日本版 GHQ28 は .66～.91、大学生活不安尺度は .82～.91、心理的 well-being 尺度は .77～.91、PIL テスト日本版 Part A は .87、精神的回復力尺度は .72～.85、職業未決定尺度は .72～.83、大学生活チェックカタログは .60～.90、日本版 NEO-FFI は .68～.81、自尊感情尺度は .84、自意識尺度は .86～.87、Rasmussen の自我同一性尺度日本語版は .54～.90、青年期の自我発達上の危機状態尺度は .32～.87、達成動機測定尺度は .78～.85、成功恐怖測定尺度（FS1）は .53～.84、新完全主義尺度は .63～.80、Locus of Control 尺度は .68、楽観性尺度は .78～.83、開示状況質問紙は .35～.86、青年用アサーション尺度は .63～.78、孤独感の類型判別尺度は .65～.89、劣等感項目は .82～.96 であった。

関連尺度は全体的には概ね高い信頼性（内的整合性）をもつことが確認された。ただし一部の下位尺度においてはα係数が低い値を示した。それらの下位尺度を用いた以下の分析結果については参考扱いとする。

２　大学生不登校傾向尺度と関連尺度との関連

（１）大学生不登校傾向尺度とメンタルヘルスに関する尺度との関連

本尺度とメンタルヘルスに関する尺度との相関係数を表５に示した。

表５　大学生不登校傾向尺度とメンタルヘルスに関する尺度との関連

	n	大学生不登校傾向尺度	
		登校回避行動	登校回避感情
UPI 学生精神的健康調査			
56 項目（.93）	236	.28***	.47***
UPI-RS			
56 項目（.97）	201	.24**	.24**
日本版 GHQ28			
身体的症状（.77）	335	.15**	.30***
不安・不眠（.80）		.14*	.20***
社会的活動障害（.66）		.10	.11*
うつ状態（.91）		.25***	.30***
尺度全体（.89）		.22***	.32***
大学生活不安尺度			
日常生活不安（.82）	238	.20**	.14*
評価不安（.91）		.02	.14*
大学不適応（.88）		.32***	.35***
尺度全体（.91）		.18**	.22***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001
（ ）内はα係数

１）大学生不登校傾向尺度と UPI 学生精神的健康調査との関連

本尺度と UPI 学生精神的健康調査との関連については、本尺度の登校回避行動が UPI 学生精神的健康調査と有意な弱い正の相関（r=.28, p<.001）を示した。また、本尺度の登校回避感情は UPI 学生精神的健康調査と有意な比較的高い正の相関（r=.47, p<.001）を示した。

２）大学生不登校傾向尺度と UPI-RS との関連

本尺度の登校回避行動は UPI-RS と有意な弱い正の相関（r=.24, p<.01）を示した。登校回避感情は UPI-RS と有意な弱い正の相関（r=.24, p<.01）を示した。

３）大学生不登校傾向尺度と日本版 GHQ28 との関連

本尺度の登校回避行動は日本版 GHQ28 のうつ状態（r=.25, p<.001）、尺度全体（r=.22, p<.001）と有意な弱い正の相関を示した。登校回避感情は身体的症状（r=.30, p<.001）、不安・不眠（r=.20, p<.001）、うつ状態（r=.30, p<.001）、尺度全体（r=.32, p<.001）と有意な弱い正の相関を示した。なお、相関係数が有意であっても、r=|.20| 未満の場合は本文では言及しない（以下同様）。

４）大学生不登校傾向尺度と大学生活不安尺度との関連

本尺度の登校回避行動は大学生活不安尺度の日常生活不安（r=.20, p<.01）、大学不適応（r=.32, p<.001）と有意な弱い正の相関を示した。登校回避感情は大学不適応（r=.35, p<.001）、尺度全体（r=.22, p<.001）と有意な弱い正の相関を示した。

以上の結果より、不登校傾向の登校回避行動と登校回避感情はともに精神的不健康度と密接な関連をもつことが明らかにされた。なお、表５全体を見てわかるように、総じて登校回避行動よりも登校回避感情のほうがその関連性がやや強い傾向にあった。

（２）大学生不登校傾向尺度と適応に関する尺度との関連

本尺度と適応に関する尺度との相関係数を表６に示した。

表６　大学生不登校傾向尺度と適応に関する尺度との関連

	n	大学生不登校傾向尺度	
		登校回避行動	登校回避感情
心理的 well-being 尺度			
人格的成長（.82）		−.16*	−.30***
人生における目的（.91）		−.23***	−.37***
自律性（.80）	247	−.11	−.28***
自己受容力（.81）		−.09	−.32***
環境制御力（.77）		−.07	−.25***
積極的な他者関係（.83）		−.09	−.31***
PIL テスト日本版 Part A			
尺度全体（.87）	165	−.23**	−.25**
精神的回復力尺度			
新奇性追求（.81）		−.18**	−.15*
感情調整（.72）	248	−.18**	−.27***
肯定的な未来志向（.85）		−.18**	−.22***
尺度全体（.83）		−.25***	−.29***
職業未決定尺度			
未熟（.83）		.16*	.08
混乱（.83）		.20**	.09
猶予（.73）	193	.22**	.12
模索（.72）		.01	−.10
安直（.78）		.20**	.10
決定（.80）		−.08	−.12
大学生活チェックカタログ			
自己不確実感・不安（.90）		.07	.22**
社会的関係（.83）		−.01	−.09
現在のいきがい・充実（.84）		−.23***	−.26***
自己肯定感（.81）		−.09	−.20**
将来への展望（.80）		−.07	−.16*
大学内学習（.72）	238	−.46***	−.42***
積極性（.74）		.05	−.09
大学全体への満足感（.76）		−.26***	−.36***
睡眠・食欲・体調（.67）		−.10	−.20**
仲間との活動（.60）		.16*	−.02
無気力（.77）		.15*	.23***
大学外学習（.63）		.11	.00
尺度全体（.83）		−.11	−.21**

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

（ ）内は α 係数

１）大学生不登校傾向尺度と心理的 well-being 尺度との関連

本尺度の登校回避行動は心理的 well-being 尺度の人生における目的（$r=-.23$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。登校回避感情は人格的成長（$r=-.30$, $p<.001$）、人生における目的（$r=-.37$, $p<.001$）、自律性（$r=-.28$, $p<.001$）、自己受容力（$r=-.32$, $p<.001$）、環境制御力（$r=-.25$, $p<.001$）、積極的な他者関係（$r=-.31$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。

２）大学生不登校傾向尺度と PIL テスト日本版 Part A との関連

本尺度の登校回避行動は PIL テスト日本版 Part A と有意な弱い負の相関（$r=-.23$, $p<.01$）を示した。登校回避感情は PIL テスト日本版 Part A と有意な弱い負の相関（$r=-.25$, $p<.01$）を示した。

３）大学生不登校傾向尺度と精神的回復力尺度との関連

本尺度の登校回避行動は精神的回復力尺度の尺度全体（$r=-.25$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。登校回避感情は感情調整（$r=-.27$, $p<.001$）、肯定的な未来志向（$r=-.22$, $p<.001$）、尺度全体（$r=-.29$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。

４）大学生不登校傾向尺度と職業未決定尺度との関連

本尺度の登校回避行動は職業未決定尺度の混乱（$r=.20$, $p<.01$）、猶予（$r=.22$, $p<.01$）、安直（$r=.20$, $p<.01$）と有意な弱い正の相関を示した。

５）大学生不登校傾向尺度と大学生活チェックカタログとの関連

本尺度の登校回避行動は大学生活チェックカタログの現在のいきがい・充実（$r=-.23$, $p<.001$）、大学全体への満足感（$r=-.26$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示し、大学内学習（$r=-.46$, $p<.001$）と有意な比較的高い負の相関を示した。また、登校回避感情は自己不確実感・不安（$r=.22$, $p<.01$）、無気力（$r=.23$, $p<.001$）と有意な弱い正の相関を示し、現在のいきがい・充実（$r=-.26$, $p<.001$）、自己肯定感（$r=-.20$, $p<.01$）、大学全体への満足感（$r=-.36$, $p<.001$）、睡眠・食欲・体調（$r=-.20$, $p<.01$）、尺度全体（$r=-.21$, $p<.01$）と有意な弱い負の相関を示し、大学内学習（$r=-.46$, $p<.001$）と有意な比較的高い負の相関を示した。

以上の結果より、登校回避行動は人生における目的（いきがい感）の低さ、大学・講義への満足感の低さ、精神的回復力の低さ、職業未決定状態（混乱・猶予・安直）などと関連をもつ傾向にあった。また、登校回避感情は主に心理的 well-being 全般の低さ、人生における目的（生きがい感）の低さ、精神的回復力全般の低さ、大学生活における QOL 全般の低さと関連をもつことが示唆された。

（３）大学生不登校傾向尺度とパーソナリティ一般に関する尺度との関連

本尺度とパーソナリティ一般に関する尺度との相関係数を表７に示した。

表７　大学生不登校傾向尺度とパーソナリティ一般に関する尺度との関連

	n	大学生不登校傾向尺度	
		登校回避行動	登校回避感情
日本版 NEO-FFI			
神経症傾向（.81）	248	.07	.22***
外向性（.77）		-.13*	-.23***
開放性（.68）		-.04	.01
調和性（.78）		-.31***	-.21**
誠実性（.75）		-.26***	-.24***

*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

（ ）内は α 係数

１）大学生不登校傾向尺度と日本版 NEO-FFI との関連

本尺度の登校回避行動は日本版 NEO-FFI の調和性（$r=-.31$, $p<.001$）、誠実性（$r=-.26$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。登校回避感情は神経症傾向（$r=.22$, $p<.001$）と有意な弱い正の相関を示し、外向性（$r=-.23$, $p<.001$）、調和性（$r=-.21$, $p<.01$）、誠実性（$r=-.24$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。

すなわち、登校回避行動は調和性の低さ、誠実性の低さと関連があり、登校回避感情は神経症傾向の高さ、外向性の低さ、調和性の低さ、誠実性の低さと関連があることが示唆された。

（４）大学生不登校傾向尺度と自己・自我に関する尺度との関連

本尺度と自己・自我に関する尺度との相関係数を表８に示した。

表８　大学生不登校傾向尺度と自己・自我に関する尺度との関連

	n	大学生不登校傾向尺度	
		登校回避行動	登校回避感情
自尊感情尺度			
尺度全体（.84）	232	-.17**	-.20**
自意識尺度			
公的自意識（.87）	232	.24***	.14*
私的自意識（.86）		.06	.06
Rasmussen の自我同一性尺度日本語版			
基本的信頼感対不信感（.54）		-.24***	-.39***
自律性対恥・疑惑（.72）		-.06	-.28***
自主性対罪悪感（.61）	282	-.12*	-.28***
勤勉性対劣等感（.76）		-.20**	-.38***
同一性対同一性拡散（.75）		-.22***	-.43***
親密性対孤立（.68）		-.04	-.26***
尺度全体（.90）		-.20**	-.46***
青年期の自我発達上の危機状態尺度			
A 水準（青年期の心の葛藤）			
決断力欠如（.67）		.03	.17**
同一性拡散（.67）		.15*	.25***
自己収縮（.50）		.22**	.21**
自己開示対象の欠如（.74）		.16*	.22***
実行力欠如（.38）		.10	.20**
親とのアンビバレント感情（.56）		.02	.10
親からの独立と依存のアンビバレンス（.58）		-.08	.05
A 水準全体（.82）	248	.13*	.28***
B 水準（青年期の不適応）			
緊張とその状況の回避（.70）		.28***	.23***
精神衰弱（.68）		.15*	.23***
身体的痛み（.44）		.11	.13*
稀な体験や精神・身体的反応（.61）		.20**	.16**
閉じこもり（.35）		.44***	.58***
身体的疲労感（.38）		.39***	.33***
対人的過敏性（.32）		.21**	.21**
B 水準全体（.82）		.40***	.42***
尺度全体（.87）		.27***	.38***

*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$
（ ）内はα係数

１）大学生不登校傾向尺度と自尊感情尺度との関連

本尺度の登校回避感情は自尊感情尺度と有意な弱い負の相関（$r=-.20, p<.01$）を示した。

２）大学生不登校傾向尺度と自意識尺度との関連

本尺度の登校回避行動は自意識尺度の公的自意識と有意な弱い正の相関（$r=.24, p<.001$）を示した。

３）大学生不登校傾向尺度と Rasmussen の自我同一性尺度日本語版との関連

本尺度の登校回避行動は Rasmussen の自我同一性尺度日本語版の基本的信頼感対不信感（$r=-.24, p<.001$）、勤勉性対劣等感（$r=-.20, p<.01$）、同一性対同一性拡散（$r=-.22, p<.001$）、尺度全体（$r=-.20, p<.01$）と有意な弱い負の相関を示した。登校回避感情は基本的信頼感対不信感（$r=-.39, p<.001$）、自律性対恥・疑惑（$r=-.28, p<.001$）、自主性対罪悪感（$r=-.28, p<.001$）、勤勉性対劣等感（$r=-.38, p<.001$）、親密性対孤立（$r=-.26, p<.001$）と有意な弱い負の相関を示し、同一性対同一性拡散（$r=-.43, p<.001$）、尺度全体（$r=-.46, p<.001$）と有意な比較的高い負の相関を示した。

４）大学生不登校傾向尺度と青年期の自我発達上の危機状態尺度との関連

本尺度の登校回避行動は青年期の自我発達上の危機状態尺度の自己収縮（$r=.22, p<.01$）、緊張とその状況の回避（$r=.28, p<.001$）、稀な体験や精神・身体的反応（$r=.20, p<.01$）、身体的疲労感（$r=.39, p<.001$）、対人的過敏性（$r=.21, p<.01$）、尺度全体（$r=.27, p<.001$）と有意な弱い正の相関を示し、閉じこもり（$r=.44, p<.001$）、B 水準全体（$r=.40, p<.001$）と有意な比較的強い正の相関を示した。

登校回避感情は同一性拡散（$r=.25, p<.001$）、自己収縮（$r=.21, p<.01$）、自己開示対象の欠如（$r=.22, p<.001$）、実行力欠如（$r=.20, p<.01$）、A 水準全体（$r=.28, p<.001$）、緊張とその状況の回避（$r=.23, p<.001$）、精神衰弱（$r=.23, p<.001$）、身体的疲労感（$r=.33, p<.001$）、対人的過敏性（$r=.21, p<.01$）、尺度全体（$r=.38, p<.001$）と有意な弱い正の相関を示し、閉じこもり（$r=.58, p<.001$）、B 水準全体（$r=.42, p<.001$）と有意な比較的強い正の相関を示した。

以上の結果より、登校回避行動は公的自意識の高さ、自我同一性の低さ（不信感、劣等感、同一性拡散）、自我発達上の危機状態（不適応）と関連があり、登校回避感情は自尊感情の低さ、自我同一性全般の低さ、自我発達上の危機状態全般（葛藤・不適応）と関連があることが示唆された。

（５）大学生不登校傾向尺度と動機づけ・認知に関する尺度との関連

本尺度と動機づけ・認知に関する尺度との相関係数を表９に示した。

表９　大学生不登校傾向尺度と動機づけ・認知に関する尺度との関連

	n	大学生不登校傾向尺度	
		登校回避行動	登校回避感情
達成動機測定尺度			
自己充実的達成動機（.85）	247	−.17**	−.26***
競争的達成動機（.78）		.09	.15*
成功恐怖測定尺度（FS1）			
対人的配慮（.84）	247	.06	.30***
成功の否定的感情（.72）		−.03	.19**
優越欲求の少なさ（.53）		.08	.14*
新完全主義尺度			
完全でありたいという欲求（.80）		−.18**	−.11
自分に高い目標を課する傾向（.63）	247	−.15*	−.19**
ミス（失敗）を過度に気にする傾向（.74）		−.01	.17**
自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向（.65）		−.20**	−.08
Locus of Control 尺度	120		
尺度全体（.68）		−.11	−.24**
楽観性尺度			
気楽さ（.83）	120	.03	.04
前向きさ（.78）		−.01	−.22*

*$p<.05$, **$p<.01$, ***$p<.001$

（ ）内はα係数

１）大学生不登校傾向尺度と達成動機測定尺度との関連

本尺度の登校回避感情は達成動機測定尺度の自己充実的達成動機（$r=-.26$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。

２）大学生不登校傾向尺度と成功恐怖測定尺度（FS1）との関連

本尺度の登校回避感情は成功恐怖測定尺度（FS1）の対人的配慮（$r=.30$, $p<.001$）と有意な弱い正の相関を示した。

３）大学生不登校傾向尺度と新完全主義尺度との関連

本尺度の登校回避行動は新完全主義尺度の自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向（$r=-.20$, $p<.01$）と有意な弱い負の相関を示した。

４）大学生不登校傾向尺度と Locus of Control 尺度との関連

本尺度の登校回避感情は Locus of Control 尺度（$r=-.24$, $p<.01$）と有意な弱い負の相関を示した。

５）大学生不登校傾向尺度と楽観性尺度との関連

本尺度の登校回避感情は楽観性尺度の前向きさ（$r=-.22$, $p<.01$）と有意な弱い負の相関を示した。

以上の結果より、登校回避行動は完全主義（自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向）の低さと関連をもち、一方、登校回避感情は達成動機（自己充実的達成動機）の低さ、成功恐怖（対人的配慮）の高さ、外的統制の傾向、楽観性（前向きさ）の低さと関連を示した。

（６）大学生不登校傾向尺度と対人関係に関する尺度との関連

本尺度と対人関係に関する尺度との相関係数を表 10 に示した。

１）大学生不登校傾向尺度と開示状況質問紙との関連

本尺度の登校回避感情は開示状況質問紙の家族的状況（$r=-.29$, $p<.001$）、尺度全体（$r=-.22$, $p<.01$）と有意な弱い負の相関を示した。

２）大学生不登校傾向尺度と青年用アサーション尺度との関連

本尺度の登校回避感情は青年用アサーション尺度の関係形成（$r=-.21$, $p<.01$）、説得交渉（$r=-.21$, $p<.01$）、尺度全体（$r=-.25$, $p<.01$）と有意な弱い負の相関を示した。

３）大学生不登校傾向尺度と孤独感の類型判別尺度との関連

本尺度の登校回避行動は孤独感の類型判別尺度の人間同士の理解・共感の可能性（$r=-.25$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。登校回避感情も同様に人間同士の理解・共感の可能性（$r=-.25$, $p<.001$）と有意な弱い負の相関を示した。

４）大学生不登校傾向尺度と劣等感項目との関連

本尺度の登校回避感情は劣等感項目の友達づくりの下手さ（$r=.26$, $p<.01$）と有意な弱い正の相関を示した。

５）大学生不登校傾向尺度と P-F スタディ（成人用）との関連

本尺度の登校回避行動は P-F スタディ（成人用）の障害優位型（$r=.20$, $p<.05$）と有意な弱い正の相関を示した。登校回避感情は自罰反応（$r=-.22$, $p<.05$）と有意な弱い負の相関を示し、E－E（$r=.20$, $p<.05$）と有意な弱い正の相関を示した。

以上の結果より、登校回避行動は孤独感の高さ（人間同士の理解・共感の可能性の低さ）と関連をもち、登校回避感情は、自己開示の低さ（特に家族状況）、アサーション全般の低さ、孤独感の高さ（人間同士の理解・共感の可能性の低さ）、劣等感の高さ（友達づくりの下手さ）と関連をもつことが示された。

表 10　大学生不登校傾向尺度と対人関係に関する尺度との関連

	n	大学生不登校傾向尺度	
		登校回避行動	登校回避感情
開示状況質問紙			
個人的状況（.77）	232	−.02	−.12
社会的状況（.79）		−.02	−.14*
非日常的状況（.51）		.02	−.18**
密接的状況（.84）		−.07	−.14*
家族的状況（.35）		−.15*	−.29***
尺度全体（.86）		−.05	−.22**
青年用アサーション尺度			
関係形成（.74）	165	.00	−.21**
説得交渉（.63）		−.01	−.21**
尺度全体（.78）		.00	−.25**
孤独感の類型判別尺度			
人間同士の理解・共感の可能性（.89）	232	−.25***	−.25***
自己の個別性の自覚（.65）		.14*	.14*
劣等感項目			
異性とのつきあいの苦手さ（.95）	165	.10	.16*
学業成績の悪さ（.93）		.16*	.10
運動能力の低さ（.96）		.09	.09
家庭水準の低さ（.84）		.19*	.09
性格の悪さ（.85）		.17*	.11
友達づくりの下手さ（.90）		.15	.26**
統率力の欠如（.91）		.16*	.17*
身体的魅力のなさ（.82）		.10	.10
P-F スタディ（成人用）			
GCR	104	.05	.11
アグレッション方向			
他責的反応		.05	.14
自責的反応		.03	−.12
無責的反応		−.11	−.09
アグレッション型			
障害優位型		.20*	.11
自我防衛型		−.08	.01
要求固執型		−.10	−.10
各スコアリング因子			
他責逡巡反応		.13	.06
他罰反応		.02	.16
他責固執反応		−.07	−.06
自責逡巡反応		.15	.05
自罰反応		−.08	−.22*
自責固執反応		−.02	−.01
無責逡巡反応		.02	.05
無罰反応		−.07	−.06
無責固執反応		−.10	−.11
超自我因子			
$\underline{E}$		−.07	.14
$\underline{I}$		−.09	−.07
$\underline{E}+\underline{I}$		−.10	.06
$E-\underline{E}$		.12	.20*
$I-\underline{I}$		−.05	−.19
$(M-A)+\underline{I}$		−.12	−.11

*p<.05, **p<.01, ***p<.001
（ ）内はα係数

また、本尺度と P-F スタディとの関連を検討した結果によると、登校回避行動は障害優位型（フラストレーションに対して消極的な反応であり、相手に直接表現できない対人関係の脆弱さを示す反応）と関連性を示した。また、登校回避感情は自罰反応の低さ（フラストレーションの原因が自分にあることを率直に認めて謝罪する傾向の低さ）と、E-E（未熟で衝動的な攻撃性の高さ）と関連をもつことが示唆された。

３　まとめと今後の課題

本研究の結果より、本尺度で測定される不登校傾向は、「メンタルヘルス」「適応」「パーソナリティ一般」「自己・自我」「動機づけ・認知」「対人関係」に関する心理的特性と関連性をもつことが判明し、本尺度で測定される不登校傾向の特徴をこれまで以上に明確に捉えることができた。無論、それぞれの心理的特性が不登校傾向の要因となっていることを裏付けたものではないが、今後、因果モデルを構築する上で参考になるデータが呈示されたと考えられる。また、本尺度は心理尺度として一定水準以上の信頼性と妥当性を備えていると考えられるが、本尺度の高い有効性を保証するためにも、今後、さらに大規模かつ多様なデータを収集し、実証的検討を継続する必要がある。

文献

Costa, P. T., Jr., & McCrae, R. R. 1992 *Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual.* Odessa: Psychological Assessment Resources.

遠藤公久　1989　開示状況における開示意向と開示規範からのズレとについて―性格特徴との関連 . 教育心理学研究 , **37**, 20-28.

藤井義久　1998　大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 . 心理学研究 , **68**, 441-448.

福田一彦・小林重雄　1973　自己評価式抑うつ性尺度の研究 . 精神神経学雑誌 , **75**, 673-679.

福盛英明・峰松修・馬場園明・一宮厚・永野純・藤野武彦・上園慶子　2001　大学生の QOL の研究 : 大学生用 QOL 質問票「大学生活チェックカタログ」の開発 . *CAMPUS HEALTH*, **37(2)**, 55-60.

秦一士　2007　P-F スタディの理論と実際 . 北大路書房 .

秦一士　2010　P-F スタディ アセスメント要領 . 北大路書房 .

林勝造（著者代表）　2007　P-F スタディ解説 2006 年版―基本手引 . 三京房 .

堀井俊章　2006a　対人恐怖心性尺度Ⅱの開発―対人関係におけるおびえの心性を測定する試み . 学生相談研究 , **26**, 221-232.

堀井俊章　2006b　大学生における不登校傾向の実態調査．山形大学保健管理センター紀要 , **5**, 62-67.

堀井俊章　2013a　大学生の不登校に関する研究の動向．横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ（教育科学）, **15**, 75-84.

堀井俊章　2013b　大学生不登校傾向尺度の開発 . 学生相談研究 , **33**, 246-258.

堀井俊章・小川捷之　1996　対人恐怖心性尺度の作成 . 上智大学心理学年報 , **20**, 55-65.

堀井俊章・小川捷之　1997　対人恐怖心性尺度の作成（続報）. 上智大学心理学年報 , **21**, 43-51.

堀野緑　1991　成功恐怖の再検討 . 実験社会心理学研究 , **31**, 61-68.

堀野緑・森和代　1991　抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 . 教育心理学研究 , **39**, 308-315.

井崎ゆみ子・武久美奈子・西尾よしみ・石原容子・早渕純子・横山小百合・佐藤八重子・前田健一

2009　大学生の不登校にみられた精神医学的問題 . *CAMPUS HEALTH*, **46(1)**, 332-333.

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治　1982　Locus of Control 尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討 . 教育心理学研究 , **30**, 302-307.

高坂康雅　2008　自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的変化 . 教育心理学研究 , **56**, 218-229.

松原達哉　1995　最新 心理テスト法入門―基礎知識と技法習得のために . 日本文化科学社 .

宮下一博　1987　Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 . 教育心理学研究 , **35**, 253-258.

長尾博　1989　青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み . 教育心理学研究 , **37**, 71-77.

中川泰彬・大坊郁夫　1985　日本版 GHQ 精神健康調査票手引 . 日本文化科学社 .

西田裕紀子　2000　成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 . 教育心理学研究 , **48**, 433-443.

落合良行　1983　孤独感の類型判別尺度（LSO）の作成 . 教育心理学研究 , 31, 332-336.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治　2002　ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性―精神的回復力尺度の作成 . カウンセリング研究 , **35**, 57-65.

小柳晴生　1996　大学生の不登校―生き方の変更の場として大学を利用する学生たち . こころの科学 , **69**, 33-38.

PIL 研究会編　1998　PIL テスト日本版ハンドブック . システム・パブリカ .

Rasmussen, J. E. 1961 An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorders. *Dissertation Abstracts International*, **22(5-A)**, 1911-1912.

Rasmussen, J. E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

桜井茂男・大谷佳子　1997 “自己に求める完全主義” と抑うつ傾向および絶望感との関係 . 心理学研究 , **68**, 179-186.

下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山緑　1999　NEO-PI-R, NEO-FFI 共通マニュアル . 東京心理 .

下山晴彦　1986　大学生の職業未決定の研究 . 教育心理学研究 , **34**, 20-30.

下山晴彦　1995　男子大学生の無気力の研究 . 教育心理学研究 , **43**, 145-155.

菅原健介　1984　自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み . 心理学研究 , **55**, 184-188. 1984.

鈴木康之・磯辺典子・内野悌司・藤巴正和　2004　不登校大学生の心理社会的特性 . 総合保健科学 : 広島大学保健管理センター研究論文集 , **20**, 43-50.

高橋知音・小林正信　2004　４段階評定による新 UPI の開発―信頼性、妥当性の検討と下位尺度の構成 . *CAMPUS HEALTH*, **41(2)**, 69-74.

高橋俊彦　1996　大学生とアイデンティティ―無気力で「不登校」の学生について . 学校保健研究 , **38**, 230-235.

高塚雄介　2000　大学生の不登校の心理的要因についての考察 . 第 21 回全国大学メンタルヘルス研究会報告書 , 74-75.

高塚雄介　2002　ひきこもる心理 とじこもる心理―自立社会の落とし穴 . 学陽書房 .

玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代　2001　青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 . 奈良教育大学紀要 . 人文・社会科学 , **50**, 221-232.

津田均・古橋忠晃・鶴田和美・杉村和美・田中伸明・加藤大樹・桂田祐介・船津静代・神村静恵・小川豊昭・鈴木國文　2008　名古屋大学不登校学生の特徴と経過―４年間のカルテが語る実態 . 名古屋大学学生相談総合センター紀要 , **8**, 3-10.

鶴田和美・小川豊昭・杉村和美・山口智子・赤堀薫子・船津静代・鈴木國文　2002　名古屋大学における不登校の現状と対応 . 名古屋大学学生相談総合センター紀要 , **2**, 2-15.

山本真理子・松井豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面 . 教育心理学研究 , **30**, 64-68.

吉村典子　2007　楽観性が健康に及ぼす影響 : リスクテイキング行動 , 生活習慣 , 楽観的認知バイアス , 健康状態との関連から . 甲南女子大学研究紀要 . 人間科学編 , **43**, 9-18.